上島の文芸

水曜会【弓削】

新涼に命永らへをりしかな　亀島　一美

島々を封ずる雲や厄日今日　田坂　紫苑

朝顔の絡(から)まく竹の尽きにけり　田坂芙代子

声掛けてかけて水遣り百日紅(さるすべり)　中本砂恵子

逝きし友二人の墓参せし帰郷　中脇　幸造

生名短歌会【生名】

朝凪の庭を彩るピンクのダリヤ雀がチョンチョ二羽で訪(と)い来ぬ　村上　宗子

妻と吾れ時には笑って過そうか今日と言う日はもう来ないから　村上　司

晴れあがる早朝の庭華やかに揚羽蝶二つ交(か)う様羨(さまとも)し　村上　昌子

朝早く夏野菜畠見廻りて我れの健康の一つトマトもぐ　渡辺スズ子

海面にゆれる因島の街の灯(ひ)を見つつしばらく揚げ花火待つ　池本　滝子

吾のごとき庭のあじさいグラジオラス勝手気儘(きまま)に位置占めて咲く　浜田イセ子

猛暑なり外出ひかえの一人居はテレビのみでは声も掠(かす)れる　村上優美子

自殺への練習させられし事件簿と出征前夜の我れを重ねて　池田　友幸

むつみ歌会【岩城】

使ふこと少なくなりし物のひとつテレホンカード財布に眠る　宮本佳世子

さびれゆくわが集落に異国人のアパートの灯りともるも奇しき　浪本　綾子

生くる術教へてくれし祖父の嗚呼六十六回忌を勤め上げたり　池田　繁雄

熊本の山鹿のまつり壮観な千の灯闇(ともしび)に揺れをり　森本　和佳

托卵の谷見守るやホトトギス声嗄々(たけだけ)に二羽で飛びくる　浪本三千彦

風もなく猛暑日の朝草かげの白き鷺草心にそよぐ　高本　雅雄

父ははのよなべのランプ懐かしく吾育ちたる故里偲ぶ　池本　正子

魚島俳歌柳会【魚島】

サルスベリちょっぴり咲いて盆が来る

テンテコの囃(はや)し伝へよ何時(いつ)までも　三上　運

朝顔のカーテンに見る花の数　三上タキコ

先祖墓持ち来故郷が遠くなり

生きている証(あかし)猛暑も享受して　佐伯　真柳

長生きもしたいが不安福祉策

まだ若い積りの無理が通らない　城山　登

蛸漁や朝日を浴びてにじむ汗

墓参する背丈の伸びし孫娘　久保かすみ

肥えるよねぐっと堪えてる氷菓子

ルビーかないやいやあれはとまとの実　しんどふじ

上島の空を一つに大花火

新涼の富士の英姿や車窓混む　柳　小福

参道の提灯に我名の著し

靖国の御霊騒がす人の群れ　松原　瑞峰

8／18~19

俳句甲子園全国大会出場

8月18日・19日、松山市において、第15回俳句甲子園全国大会が開催され、上島町からは岩城地区の中村恵己さん、戸川沙稀さん、福岡日向子さん、檀上佳那さんが伯方高等学校Bチームのメンバーとして出場しました。伯方高等学校Bチームは予選で甲南高等学校、大阪府立吹田東高等学校と対戦、惜しくも決勝トーナメント進出はなりませんでしたが、生徒のみなさんの今後益々のご活躍を期待しております。

かみじま歴史探訪

番外編（シリーズ続報）

調査依頼があった田坂初太郎と佐渡国丸

インターネットで『広報かみじま』の「歴史探訪（郷土の先輩たち）②『近代海運界の星、田坂初太郎』を見られた一人（大阪府内の秋元美智子様）から、次のようなご依頼を頂きました。『広報』に登場している秋田藤十郎は、私の曾祖父に当ります。その生涯を調べております。実は、いつ曾祖父が佐渡を離れ、東京に移り住んだのかその経緯がはっきりと分かっていません。貴地の史料をご教示ください。」

とりあえず弓削商船高専の学芸部誌に寄稿していた田坂初太郎の伝記をお送りすると、折り返して、次のような私信と「…曾祖父・秋田藤十郎を偲ぶ』という秋元さんの論文が掲載されている『佐渡郷土文化』一二八号（本年二月刊、写真）を頂きました。

「…佐渡から遠く離れた愛媛県の上島町に、私が知りたいと思っていた以上の資料があるとは夢にも思っていませんでした。…当時の新聞を調べてみますと、曾祖父が所有し、遭難した船に保険金が掛けられていたことや…明治二五年八月に（新潟県佐渡ヶ島の）相川町長を辞任…同時に佐渡を離れたようです。」

この文面から、秋元さんの曾祖父、秋田藤十郎さんは、江戸時代から日本海航路で活躍していた北前船の伝統を引き継いでいるような実業家で、佐渡でも有力な政治家であったような印象を受けました。一方、海運界に身を投じ、実地上がりで汽船の船長となっていた田坂初太郎は、当時、海運会社の社長であった秋田藤十郎のもとで船長として勤務していました。

初太郎の生い立ちは、その自叙伝『努力四十年』によると次のようです。幕末の嘉永四年に下弓削の浜都に誕生、寺子屋で学んだのち、明治四年、日本郵船株式会社の前身、日本国郵便蒸気船会社の水夫見習となりました。西南戦争が起ころうとしていた頃、警視庁の水上警察の雇員に採用され、警備船の水夫監督となり、その後は民有の帆船の船長として乗務していました。そのころ、甲種（大型、外国航路）船長免状の取得を勧められ、猛勉強の結果、見事に合格、工部省の千早丸の船長となりました。続いて三井物産会社から日本石炭会社に移り、帆船の船長となりましたが、間もなく同社所有の汽船、豊国丸の船長となりました。この豊国丸が佐渡の秋田藤十郎に譲り渡され、佐渡丸と改名されましたが、田坂初太郎は引き続いて同船の船長として乗務していました。

この秋田藤十郎社長のもとで、田坂船長は東京、門司、新潟、北海道間を巧みにつないで輸送網を確立しています。ところが、その主役であった佐渡丸は、急病で田坂が下船中（明治二十三年七月）に北海道松前沖で座礁、船体は放棄されました。幸い日本海上保険に加入していたので、保険金に不足分を追加して、代船を購入することとなりました。当時、国内には適当な売船がなかったので、香港のサムソン商会が入手していた汽船（千二百五十トン）を買い入れることになり、田坂初太郎はその船を日本に廻航するため、明治二十四年二月に香港に出向します。『努力四十年』には次のように劇的なドラマが集約されています。

「船舶売価は五万円にして、内一万円は為替手形として…香上銀行本店に振り込めば、直ちに神戸に廻航し、川崎造船所に入り…残金引き換えにて、これを買主に引き渡す…予は…電信をもって船主に対して契約締結の旨を報じ、かつ速やかに手付け金一万円を香上銀行に振り込むことを要請したり…期日に至るも船主より一文の送金なし。送金なかりしも道理、船主は佐渡丸沈没後、定期相場に手を染め、巨万の富を獲得せんと試みたるが…彼は日本海上保険会社より受取りたる莫大の保険料を瞬く間に損失し、祖先の遺産なりと称する古金も影を留めず…五月まで香港に留まり、滞留正に一百日を算せり…船主に会いて事情を確かめる必要ありしより、ついに意を決して神戸に帰還せり…前船主秋田藤十郎氏は…特に高田商会を説きて奔走…予が神戸に帰着するや…大阪支店に向けて一万円の送金あり…香上銀行に振り込みたるが、十数日を経て売船佐渡国丸は神戸に着し、直ちに川崎造船所の船渠に入れてこれを修復したり…佐渡に帰りたる秋田氏は…資力まったく欠乏…予は依然として一箇の使用人たるに過ぎざるも…資金を調達するの一途あるのみ…」

こうして田坂船長は、二割もの高い金利で資金を調達して、残金を建て替え、佐渡国丸の新船主となりました。間もなく日清戦争が勃発すると、佐渡国丸は御用船に徴用され、初太郎はかわりに汽船玉姫丸を入手して海運界で活躍しています。

一方、徴用された佐渡国丸には、当時、遼東半島で従軍記者として活動していた松山出身の俳人・正岡子規が日本へ帰還する際に乗船しています。彼の『従軍記事』には次のような記述が見られます。「（明治二十八年四月）十四日、佐渡国丸と言う御用船に乗り込む。人皆梅干し船とか言うとか…」子規が喀血したのは、その翌々日の四月十七日、この佐渡国丸の船上でした。

日清戦争が終結すると、徴用船舶は返却されましたが、佐渡国という名称は、その後も変更されてはいません。田坂初太郎は、この船の産みの親が佐渡ヶ島の秋田藤十郎であったことを決して忘れてはいなかったのでは…。こうして蓄積された田坂の経済力は、明治三十四年に弓削村外一ヶ村立で創設された弓削海員学校（現高専）にも大きく寄与しています。後に続く後輩たちの為に…

『佐渡郷土文化』

弓削商船高専・岡山商科大学名誉教授
上島町文化財保護審議会顧問　村上　貢　稿